

記 事

例会案内

日本医史学会 10月例会

令和5年10月28日(土)

対面・オンラインハイブリッド開催(予定)

1. 「明治期『虎列刺病流行紀事』の変遷」  
竹原万雄(東北大学)

明治時代、コレラが流行した年には内務省衛生局や各府県で『虎列刺病流行紀事』を作成しました。その記載項目の分析からコレラ対策の変遷を追及します。

2. 第35回矢数医史学賞 受賞記念講演  
『『ツベルクリン騒動—明治日本の医と情報—』:  
自著を語る』  
月澤美代子(順天堂大学/M-医学史・科学史研究室)

日本医史学会 11月例会

令和5年11月25日(土)

対面・オンラインハイブリッド開催(予定)

1. 第29回富士川游学術奨励賞 受賞記念講演  
「植民地・占領地の環境適応と生活科学  
—京都帝国大学戸田衛生学教室を中心に」  
末永恵子(福島県立医科大学)

戸田正三京都帝国大学衛生学教授一門の研究と、日本の植民地政策や戦争とがどのように関係していたのかを検証する。

2. 第35回矢数医史学賞 受賞記念講演  
「受賞作『相馬事件』のこと」  
岡田靖雄(青柿舎(精神科医療史資料室))

以上は変更の可能性がありますので、必ず開催直前に医史学会のサイトをご確認ください。また、12月以降についても確定し次第、同サイトでご案内いたします。

<http://jshm.or.jp/events.html>



10月から対面とオンライン(Zoom)のハイブリッド開催への移行を予定しております。詳細については、日本医史学会事務局([office@jshm.or.jp](mailto:office@jshm.or.jp))にお問い合わせください。

また、本例会でのご発表を随時募集しております。ご希望の方は、演題・希望する月を明記の上事務局(同前)までご連絡下さい。原則として発表者は会員に限ります。

例会記録

日本医史学会 3月例会

令和5年3月25日(土)

オンライン開催

1. 「華岡流麻酔法の終焉と吸入麻酔の普及にお雇い外国人医師が果たした役割」  
牧野 洋(浜松医科大学附属病院麻酔科蘇生科講師)
2. 「味岡三伯の薬効論と近世日本の薬物書」  
吉川澄美(東京都)

日本医史学会 4月例会

令和5年4月22日(土)

オンライン開催

1. 「レブラと奇跡 脱神話化と脱医学化に向けて」  
堀 忠(関西学院大学大学院 神学研究科研究員)
2. 第28回富士川游学術奨励賞 受賞記念講演  
「明治初期の種痘再考—岡山と千葉の比較から」  
松村紀明(帝京平成大学/順天堂大学)

## 日本医史学会6月例会

令和5年6月24日(土)  
オンライン開催

1. 「海上随鷗(稲村三伯)の医書と造字について」  
西嶋佑太郎(京都大学大学院博士後期課程)
2. 「日本における結核療養所の変遷」  
青木純一(日本女子体育大学 特任教授)

## 例会抄録

## 中世日本にみる歯科医療事情

西巻 明彦

## 1. はじめに

日本の歯科医学は、幕末から明治にかけて欧米の歯科医学が入ってきたことにより現代の歯科医学が誕生したと言われる。世界史的にはフランスのピエール・フォシャールが『歯科外科医』(1728)を出版したことが、近代歯科医学の始まりと言われている。歯科医学そのものはフランスでは発達せずアメリカへ渡り、1839年ハイデン、ハリスにより世界初のボルチモア歯科医学校が誕生している。日本には主にこのアメリカ歯科医学が伝来してきたが、この伝来は複雑な受容形態を示している。このため日本における幕末以前の歯科医学史はその前史として取り扱う場合が多い。従来、前史として考えられていた中世日本の歯科医学史を、現代とどのように結びつけるかを中心に論考を行った。

## 2. 中世歯科医療の分類

中世日本の歯科医療はさまざまな職種において行われていたと考えられる。便宜的に内科的歯科医療、外科的歯科医療、技術的歯科医療、予防的・習慣的歯科医療として分類を試みた。

内科的歯科医療とは口腔に対して当時の医師、口中医、僧医が行っていたと考えられる薬物投与の内科的治療法である。一般にヒポクラテスでもガレノスにおいても、その医学書には口腔領域の病理、治療法が記述されているが、漢方医学書で

も同様である。その一例として梶原性全を取りあげると、『頓医抄』(50巻、鎌倉時代)の中で巻二十に口腔疾患が記載されており、この中の歯諸病については三十一方の処方載せられている。『頓医抄』は和文で書かれている普及版である。巻二十では『三因方』、『千金方』、『事證方』からの引用が多い傾向があり、口中書にも大きな影響を与えたと考えられるが、同時に医師や僧医も口腔疾患の治療についてもこの『頓医抄』が影響を与えたと考える。戸出一郎氏は『頓医抄』巻二十は口腔疾患の病理と治法を平易簡潔・親切丁寧に記述したもので、一読して性全が膨大な医書を狩猟し、自家薬籠中のものとしていた。」と述べている。内藤希哲の『傷寒雜病論類編』によれば口中医の診察範囲は口腔と咽喉で、現代で言うならば口歯咽喉科である。

外科的歯科医療は『小右記』長和3年正月8日に「主上御歯、以住京極辺之嫗令取給」とあり、『御堂関白日記』『明月記』にも歯抜き師の存在が記されている。抜歯は出血を伴う、いわば「穢」であるため、犬神人に近い階層が対応したのではと考えられる。『玉葉』では丹波経基が二人の小児の乳歯の抜歯を行った記述があるが、それは脱落寸前の乳歯の抜歯においては出血をほとんど伴わないことから「穢」にはあたらないとされていたとも考えられる。『吾妻鏡』にある頼朝の歯痛に丹波頼基は薬方で対応している。『抄石集』には奈良